

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1810号 2006年01月16日(月)

《 my second trip to India 》

2004年の初め以来二度目のインド取材をこの年末・年始に行いましたので、その報告を今日はしましょう。ニューデリーに入り、一晩泊まって直ぐにバンガロールに向かってインドのITのメッカを見て、そこに二日いたあとインドの商都とも言えるコルカタ(旧カルカッタ)に移動し、二日間取材した後ニューデリーに戻って二日間滞在 帰国というスケジュール。

前回(<http://www.ycaster.com/chat/2004india.html>)は最初のインド訪問ということで、ニューデリーからちょい観光コースを入れてアグラ(タージマハール)、ジャイプール(ピンクシティ)などに行った後、ボンベイ証券取引所(BSE)のあるムンバイに行き、ニューデリーに戻って帰国というスケジュールでした。今回は第一回に行けなかった都市を中心に取材。要するに二回とも、都市を中心に回ったことになる。

もっとも、インドの人口の大部分は農村に住む。都市に住むインドの人々は10億のうち2億もいない。そうした中であって、私はセキュリティーのためもあって大都市の名前のあるホテルに宿泊して、都市の一面と歴史的建造物を見、そして生活レベルの上の人達と交わっただけ。はっきり言って、私の取材には限界がある。

非常に貧しい、カースト制度の名残もはっきりしているインドの農村には、道路移動の際に通りがかりに目にしただけで、二回とも行っていない。中国の農村を扱った近著「中国農民調査」を読めば、我々が都市で目にする中国の姿と、この本で読む中国の農村の違いに愕然とする。都市と農村は、主要先進国ではなく途上国において全くかけ離れた存在だ。インドもそうだ。だから、前回に引き続き主要なインドの都市を巡ったからといって、インドをかなり理解したとは言えない。

しかし、都市はその国の人口の一部しか住まないとしても、その国の象徴ではある。都市にはその国の人々と文化、富、芸術、技術が集まり、それに犯罪組織が巣くい、独特の文化を構成している。明らかに都市は、その国の象徴の一つである。だからテロの対象になる。だから私はどこの国に行っても「ああ、この国の一部しか見ていない」と思いながら、都市をその国の一つの象徴であると思って駆け足ながらも回っている。やはり見ると見ないでは大きな違いがあるからだ。

そういう前提を起きながら、私の今回のインド訪問で得た印象を一言で言うならば、「今インドは爆発中」という表現が当たっている。2004年に行ったときと比べてもそうなの

だ。どういう意味で爆発しているかというと、景観が変わり、激しく工事が進行し、都市が拡大し、富が生まれ、車が増え、そして中産階級が厚くなってきている。2004年に行ったときにも「この国は面白い」と思ったが、今回はその思いが強くなった。

私が感心を持つばかりでなく、当然ながら日本全体からの関心も高まってきている。私が帰国の途についた時に、麻生外務大臣がインド入りした。去年は小泉首相も行った。今年にはインドはブッシュ米大統領やシラク仏大統領の訪問を受ける予定だ。インドは世界の注目を集める国となる。

日本でもインドファンドの売れ行きが好調だ。今回は、端的に私が行って帰ってきた後に、思い付くままにインドのメリットとデメリットを考えたら以下のようになったので、この点から入る。ただし一回では文章が長くなりすぎるので、何回かに分けて分析しようと思う。

《 10 merits in my view 》

筆者は今現在考えられるインド（その経済）のメリットとしては、ラフに言って次の10点が挙げられると思う。

- 1．人口の多さ
- 2．スタート台が低く、成長余地が大きい
- 3．優秀な人材を持ち、かつ高等教育（IIT、IISなど）にも優れている
- 4．世界最大の民主主義国
- 5．企業統治も透明性が高い
- 6．既にこれまでの成長の果実が生まれつつあり、中産階級が生まれている
- 7．特定産業で成長余地が大きい
- 8．外貨準備も増加を開始し、外貨危機のおそれが少ない
- 9．外交がうまい
- 10．英語と市場経済が根付いている

人口の多さとは、中国の13億に次ぐ世界第二位の人口、現状で10億、将来的には中国をも抜く可能性を持つ数字を指す。中国は人口に対して抑制的であるが、インドでは国を代表するヒンズー教も、次に多い信者を抱えるイスラム教も人口抑制には消極的である。従ってそれほど遠くない将来に、インドの人口は中国を抜き去ると考えられている。人口の増加は経済成長にとって抑止要因になることもあるし、特に成長の質にとっては打撃だろうが、それだけ大きな消費者、潜在的消費者を抱えるという側面も持つ。実際に行ってみれば分かるが、インドには購買力を持つ中産階級が生まれつつある。1割が豊かになっても、購買力のある消費者の数は1億人である。それは、世界各国の企業、従って各国にとって大きな存在となる。

しかしインドは依然として平均値を取ると非常に貧しい国である。外務省がその HP に載せている統計によると、2003年の統計で国民一人当たりの GNI は540ドルに過ぎない。日本の最新統計による国民一人当たり GDP は36000ドルに達する。非常に発射台の低い国だ。中国より明らかに低い。しかし、それはまた成長の余地の大きさを示す。

にもかかわらず、インドの高等教育は世界の関心の的だ。ガルブレイスがかつてインドと中国を比較したときにはインドに軍配が上がるとして、その理由として「インドには優秀な大学が多い」ことを挙げたことは有名な話だ。インドには IT 関係では IIT (Indian Institute of Technology) と呼ばれる IT では非常に高い技術水準を持つ大学群が全国で7つあって、ここから輩出される技術者がインドの IT 産業を支えている。また私がインドのバンガロール滞在中にテロの対象になった IIS (Indian Institute of Science) は、インドでナノテク研究のメッカになっている場所であり、ここも高い技術水準を持つ。あとインドでは医療技術も非常に高い水準を持つ。

中国とインドが最も違うのは政治体制だ。前者が共産党独裁の中央集権国家であり、胡錦濤が誰によって選ばれたのか誰も知らないのに対して、インドは世界最大の有権者数を持つ世界最大の民主主義国家だということだ。これは大きい。政治プロセスの透明性は、企業活動や企業会計の透明性に繋がる。世界中の投資家にとって、安心できる投資先になりやすい。おまけにインドは英語が肝心な時には通じる。アメリカの企業の多く、国際機関の多くがコンピューター・センターをインドに置いている理由の一つは、インドが「英語圏の国」ということにある。「民主主義 + 英語」は、世界の成長に一番乗れる要素が揃っていると見える。

2004年の年初の訪印と比べてもっとも違ったのは、「ここは豊かな消費者しか来ることは出来ない」と思われるモールやデパートの数が著しく増えたことである。ニューデリーの空港に近い近郊都市グルガオンには比較的瀟洒なモールがあちこちに出来ていたし、それでゆったりと買い物をするお客の姿が見られた。日本にもあるブランドで気が付いたのはベネトンなどが数多くあり、ルイ・ヴィトンやシャネルなどはあまり目に付かないが、いろいろな意味で日本や先進国企業の製品などを買える消費者の数は増えていると思えた。

中国もそうだが、発展の初期段階では巨大な途上国は世界経済にとってのデフレ要因とも言われるし、安い労働力の供給元ともなっているので、先進国やその企業からは「脅威だ」と思われ、もっぱら生産基地としての位置づけしか与えられない。しかし、しばらくすると、それらの国には豊かに消費者が現れて彼等が先進国企業にとっての消費者になると、今度は消費市場としての位置づけが大きくなる。今の中国がそうだし、インドはその端緒にいる。繰り返すが、なにせ10人に一人、約1割の人間が豊かになっただけでもインドでは1億の豊かな消費者が生まれる。これは先進国の企業にとっては見捨てがたい。

《 IT=powerful industry for India 》

インドが世界で注目される国になりつつあるのは、その IT の力による。タタなど有名な

製造業・複合企業も存在するが、インド生産のブランド商品がないことでもわかる通り、インドの商品はまだ世界では通用しない。タタのトラックにしる、国産乗用車アンバサダーにしる、インド国内でしか通用しない。

しかしインドは今時点で広く世界に通じる産業を持つ。それは IT である。筆者はバンガロール（今年に入って都市名を変えてベンガルールになった）では、大きな IT 産業のコンピューター関連施設を見ると同時に、これからの企業も訪れた。そこでそこに働く IT 技術者とも話をした。バンガロールではインドの平均に比べて大卒初任給は 2 割方高いのだそうだが、それでも聞いたら大学卒のインド IT 技術者の初任給は月額 5 万円から 7 万円というところだった。これは先進国企業にとって魅力だろう。

バンガロールは街の中の道を走っただけでそのインフラの酷さは目を覆うようなものがある。道路でさえガタガタなのだ。地下鉄もない。もっともニューデリーにやっとな本目の地下鉄が開通したばかりだから、インドの他の都市に地下鉄を要求するのは無理かも知れないが、コルカタにも古い地下鉄があることを考えればバンガロールにも一本あっておかしくない。しかし、今のコルカタは車の渋滞も酷さを増すばかりである。

だから、バンガロールのインフラは酷い。しかし、なぜこの街に IT 企業が集まるかと言えば、その気候が一つ大きい。この街は、「エアコン・シティー」と呼ばれている。つまり、夏涼しくて冬暖かいのだ。エアコンいらずだからそう呼ばれる。それはこの街の標高が関係している。ニューデリーなどよりよほど南で赤道に近いが、標高が 920 メートルある。それがこの都市を夏でも涼しくしている。

実際にニューデリーの気候を一言で言えば「過酷」と表現できるのに対して、バンガロールは本当に良い季候を誇る。二日間いて、私はそれを実感し、「またインドに来るならこの街だ」と思った。ニューデリーの気候の過酷さは、私がインドを去った後にインド北部を襲った大寒波に象徴される。あれでは道路生活者は一発である。何せニューデリーのそれほど遠くない北にはヒマラヤ山脈がそびえ立つ。そこから冬に降りてくる風は厳しい。

インド人そのものに IT 産業振興の理由を見つけることも可能だ。何せ数字に強いのである。2004 年の時と同様、私のインド取材に付き合ってくれたのは富山大学にも留学したことがあるチャタルジーさんで、私も彼の数字の強さにはいろいろなところで驚かされた。インド人が二桁の九九（表現はおかしいが）を出来るのは、何回も実験した。また彼の奥さんはクミさんという日本人だが、彼女によればチャタルジーさんはインドでも桁数が多いケータイ電話の番号を 100 近く記憶しているのだそうだ。彼が私より若いことを前提にしても、日本人にはなかなか出来ない。日本人はメモリーを直ぐ見てしまう。

数字（デジタル）を扱う資質があり、国が大学教育などでそれを後押しし、それに英語という武器が加わる。当面 IT 産業におけるインドの競争力は落ちそうもない。インドの IT 技術者は既に大挙して日本にも進出している。彼等は他の外国語の取得にも熱心だ。

インドは外交がうまい。パキスタン、それに敢えて言えば逆サイドの隣人であるバング

ラデシュとは相変わらず神経戦を闘っているが、世界の主要国とはほぼ良好な関係を築くことに成功した。先に述べたが、今年は長らく敵対関係にあったアメリカのブッシュ大統領が来る。また同じく関係がうまくいかなかった中国とも関係を最近になって著しく改善した。温家宝首相がインドを訪問したばかりである。インドと中国は長らく国境線を巡って対立してきたが、その問題にも一応の片を付けた。ロシアとの関係はよいし、ヨーロッパともうまく行っている。

この外交上手はインドの独立路線がもたらしたものだとも言える。イランは今核開発を巡って先進諸国、中ロとの対立路線を鮮明にしつつある。しかし、インドはずっと前に先進国の知らない間に核兵器開発を進め、核の実験も行った。その結果は制裁を受けたが、インドの人々に言わせれば「大きな影響はなかった」と言う。インドはもともと自給自足経済のような側面を持つ。

これは先週土曜日の東京新聞にも書いたのだが、インドでは驚いたことは、「使う使わないは別にして、結局核を持ったのは良かった」という意見が強かったことだ。「国際社会での地位が上がった」「アメリカの見る目が違ってきた」ということを理由に挙げる人が多かった。

インドの核実験実施の直後には国際社会に制裁を呼びかけたアメリカだったが、最近インドに対する姿勢を大きく転換した。同国の原子力開発を支援するとまで言っている。ブッシュは今年、インドを訪問する予定だ。「(核兵器保有国になってしまえば)勝ち」とあるインド人。イランなどに比べれば、インドの外交上手は明らかだ。

では、インドには死角はないのか。来週はそれを取り上げる予定。

今週の主な予定は以下の通りです。

1月16日(月)	12月国内企業物価指数 11月鉱工業生産(改定値)・設備稼働率 12月工作機械受注 米株式市場球休場(キング牧師生誕記念日)
1月17日(火)	12月消費動向調査 米1月NY連銀製造業景気指数 米12月鉱工業生産・設備稼働率
1月18日(水)	11月景気動向指数(改定値) 自民党大会 米12月消費者物価指数 米ページブック
1月19日(木)	12月首都圏マンション販売 日銀政策決定会合(~20日) 米12月住宅着工件数

米12月建設許可件数
米1月フィラデルフィア連銀指数
12月北米半導体製造装置BBレシオ
1月20日(金) 通常国会召集(～6月18日まで・150日間)
福井日銀総裁記者会見

《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。久しぶりの雨。何か懐かしい気がしました。

今日は日本人のインドに対するイメージを少し変える話をしましょう。「インド人はヒンズー教の教えから牛肉は食べない....」という話は、今はもう嘘です。インドにいる間に、私はインド人のかなり多くの方が、牛肉を食べるのをこの目で何回も見ました。限られた人の嗜好ではなくなっている。

夫妻で会ったインド人は、夫が牛肉を頼んだのを見て私の顔を見て、「彼の両親に知られたら私が怒られるんですけどね.....」と一言。それだけです。夫婦喧嘩になるわけでもない。ニューデリーのある日本料理屋でインド人を連れて入ったときのこと。メニューを見たらあまり良いものがない。で私が、半分冗談で「しゃぶしゃぶかすき焼きはないの」とインド人のウエイターに。

そしたら彼が、「神戸牛のうまいのが入っていますが.....」とつぶやく。私が「じゃここで」と言ったら、さすがに「個室に移りましょう...」と彼。なぜ輸入できるかと言えば、「バッファローの肉だ...」として入れているというのです。一緒のインド人も違和感なくすき焼きを食べました。

この二つのケースだけではない。実は他にもインド人が牛を食べているのを私は見えています。だから思う。その国に対する常識など、いつ変わっているか分からない、と。インドについて言えば、この国は神秘化されすぎていると思う。

それでは、皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》